

# 事業完了報告書

2009年(平成21年)度



## 目次

全体の評価.....	2
今期の成果とトピック .....	2
各事業 .....	3
1 就学支援事業.....	3
1-1 就学支援事業 .....	3
1-2 識字教育事業 .....	3
2 農業農村開発事業.....	4
2-1 パーマカルチャー開発モデルによるアムナイ川流域先住民族マンニャンの食の安定供給 .....	4
3 医療支援事業.....	4
3-1 事務所訪問患者数の減少 .....	4
3-2 ベイビーウォッチ事業 .....	5
3-3 ヘルスサポーターの成長.....	5
4 マンニャン人間開発センター.....	7
4-1 各種職業訓練.....	7
4-2 施設の拡張/充実 .....	12
5 不要品セールス.....	13

## 全体の評価

### 地元で“活着”した協会

2010年2月、日本人インターン生第1号の紫垣伸也（2000年5月～2003年5月赴任）、国金さつき（2000年11月～2003年8月赴任）が約7年ぶりに現地事務所を訪問、これを機会に協会の元奨学生が多くが集まった。まさに同窓会の雰囲気であったが、過去20年の協会卒業生が一同に会してみると、協会の無形財産としての人材の成長に驚かされる。植林の世界では一般に活着する苗木は全体の半分にもならないといわれている。NGOも同じではないか。毎年世界で五万というNGOが誕生しているが、本当に住民の中に根付き長く生き残る団体の数は決して多くない。まだまだ若木ではあるが活動をはじめから一世代を過ぎた21世紀協会という木は、地元マンニャン社会にしっかりと活着しているといえる。

一方現地スタッフの定着率を考えると、心許ないのも否めない。毎年新しいスタッフが誕生する一方、去

る者も後を絶たない。コミュニティや子どもたちの世話をするスタッフが急にいなくなるのだから当然事業にも影響を与える。しかし現地ボランティアスタッフを全体的に捉えてみると、あるいは少し長い時間で観察してみると、確実に人数が増えており、かつ退職しても復職を希望するスタッフの割合は大きい。フィリピン社会はもとよりマンニャン社会には勿論定職、終身雇用といった考えは弱い。人生のそれぞれのステージに合わせて住居、仕事も転々と変わる。むしろ協会の事業運営方法をいかに彼らの生活スタイルに合わせるができるか、ということが今後の課題であろう。個々のジョブについては人の出入りが頻繁であってもなんとか人海戦術的に対応できるようになった、つまり人材の量的な問題が解決された今、質の向上に向けてどのような人材配置、組織作りが適切か、を考えていく時期である。

## 今期の成果とトピック

### ✓ パーマカルチャー開発モデルによるアムナイ川流域先住民族マンニャンの食の安定供給（JICA 草の根技術協力事業）開始（11月）

JICA 草の根技術協力事業は、2年目の保健事業にあらたにパーマカルチャー事業が加わり、アムナイ地域における協会事業の3本柱（識字教育、保健衛生、農業）の地固めをするチャンスが到来した。3月末現在現地に派遣する日本人専門家がいまだ見つからず、と

いう状態ではあるが同3月には協会奨学生の一人が地元州立大学の農学部を卒業し、彼をリーダーとして迎えることにより農業事業に活気が生まれてきている。

### ✓ マンニャン人間開発センター施設の充実

JICA 草の根技術協力事業の一環でスタッフハウスの二階増設、50人収容できる食堂兼学習室の完成、ま

た奨学生寮の部屋数も3室から7室へと大幅に増改築することができた。

### ✓ 不要品セールス事業終了

約10年にわたり協会の事業を経済的に支えてきた不要品セールス事業を2010年2月終了することになった。原因は汚職が蔓延するフィリピンである程度避け得ない所轄の不正な中間搾取であるが、現地での本

事業への負担が過大なものになってきていることも大きな理由である。ただ、今後どのような代替財源を確保していくかが大きな課題として残る。

## 各事業

### 1 就学支援事業

#### 1-1 就学支援事業

今期は大学生（専門学校含）も含めついに50名が就学、5名の落伍者があったものの高い定着率であった。また、3月には小中学校生2名、ハイスクール生2名、大学生1名が卒業した。

かつて半数近くが落伍していたことを考えると、小、中、大学ともに卒業率は著しく向上している。その理由には、

- ① マンニャン集落での識字教室から公立学校へ転入といった協会一貫教育
- ② ボランティアスタッフによるきめ細かな生活、学習指導
- ③ 卒業した先輩の層が厚くなり、モデルを身近に見ることができることなどが挙げられる。



また、今年は子どもに問題があればすぐ親を呼び協議することにより、学校生活や寮生活の問題と親やコミュニティぐるみで取り組んだことも定着率に貢献していると考えられる。

ただ、まだまだ課題も多い。例えば就学して町で生活を送る子どもたちは山で両親とともに生活する同年代の子どもたちと比べ労働することを嫌う傾向がある。このことは先住民族の文化の喪失を意味し、山

で生きていく力を弱めるきっかけとなる。同年齢のタガログ人の子どもたちが両親のお手伝いを通して農業や漁業といった知識、技術を獲得していくことを考えてもこれは深刻な問題といえる。学力をつけることもどうすれば生活力を身につけることができるか、今後事業をデザインしていく上で大きな課題といえる。

#### 1-2 識字教育事業

識字ステーション（識字教室）はマンニャン集落のなかで識字教育、簡易保健所、公民館としてなどさまざまな機能を担ってきた。今期は識字教育事業だけを見ると大きな進展はなかったが新たにパーマカルチャー事業がはじまり、地域社会開発の要としてますます重要な事業になっている。特に保健事業のひとつベイビーウォッチ事業では識字教室がおかあさん、子どもたち、協会スタッフの“出会いの場”、“健康の確認の

場”となっており、地域の子どもの健康改善に少なからぬ貢献をはたした。また、栄養改善をめざす給食のための食料提供、調理にも住民が少しずつ協力的になっていることは特記事項である。

ただ、事業内容の充実はそれを運営するボランティアスタッフの仕事量の増加を意味し、彼らの負担をできるだけ軽減するための合理化と、いかに彼らの能力を開発していくかが悩みの種である。

## 2 農業農村開発事業

### 2-1 パーマカルチャー開発モデルによるアムナイ川流域先住民族マンニャンの食の安定供給

2009年11月、JICA事業緊急支援型事業として契約締結、地域のパーマカルチャーデザインによる食料増産、パーマカルチャーを応用した先住民族領の総合開発をめざす。

今期の活動の成果は以下の通りである。

- パーマカルチャーを推進するためのプロモーターの育成（計7名）
- 事業地の各集落にパイロットエリアを選ぶ
- 実験農場での食料生産開始

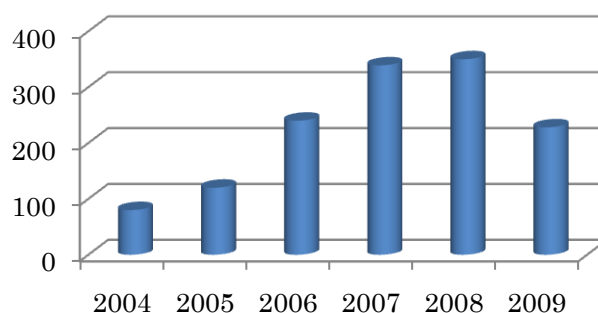


## 3 医療支援事業

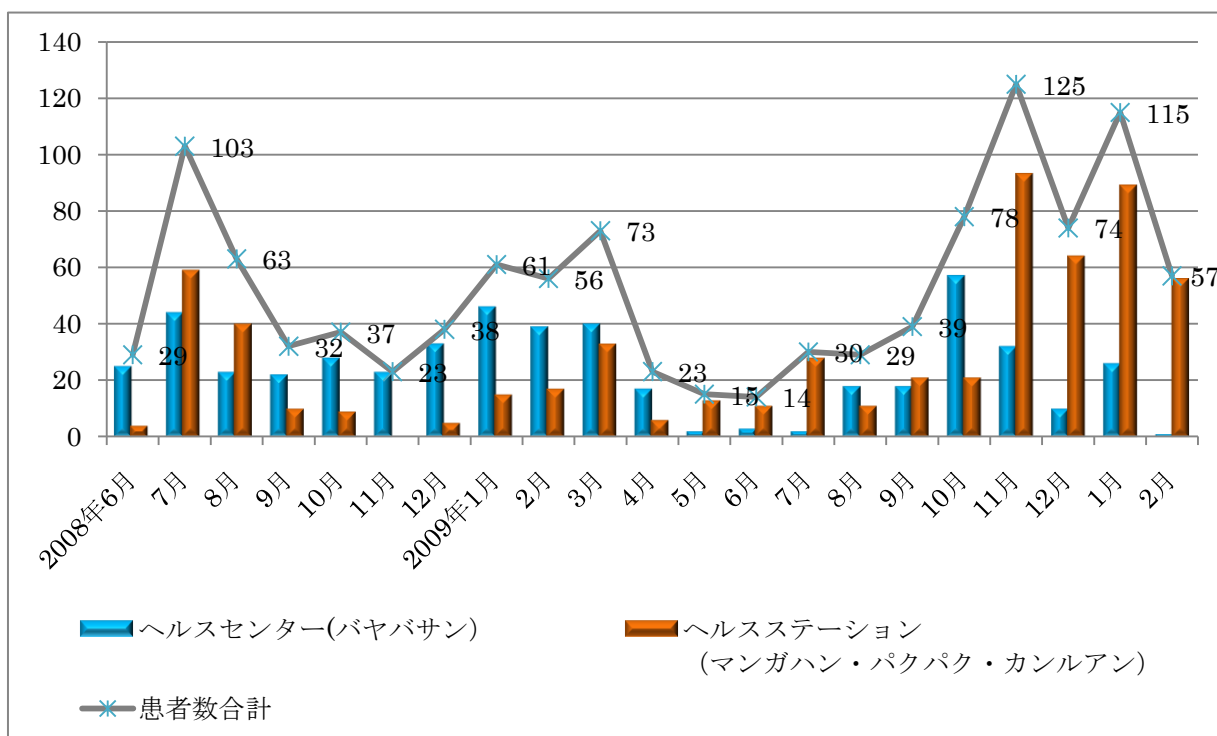
### 3-1 事務所訪問患者数の減少

医療支援事業をはじめて以来今期はじめて事務所を訪問した患者数が減少した。予想されていたことではあるが、訪問患者の大半を占めるアムナイ地域に昨年度ヘルスセンターを建設、協会ボランティアスタッフが赴任している識字ステーション（ヘルスステーション）と協力して、患者の早期発見、ファーストエイドの徹底、住民への定期的健康診断などをおこなったことが大きな原因といえる。

協会事務所を訪れた患者の推移



### ヘルスケア・センター（ヘルスステーション）の訪問患者数



### 3-2 ベイビーウォッチ事業

(本事業は 10 月に開催されたグローバルフィエスタ JAPAN2009 チャリティーラン支援先プロジェクトに決定)

乳幼児の健康を守るために住民の中に名付け親制度を導入、近所づきあいを活発にすることで子どもたちのセーフティネットづくりを試みた。狩猟採取でその日暮らしのため子どもたちのケアがおろそかにされやすい環境であるが、この活動を通して地域ぐるみで子どもたちの健康を守る環境が少しずつ生まれてきている。

各集落のヘルスサポーターは全世帯の健康チェックを週に一度、乳児の健康チェック・病人の看護を毎日行ってきたが、その際に衛生指導や乳児の世話の仕方など繰り返し説明してきた。その甲斐あってか、特に乳児の世話には気を配るようになったようだ。ヘルスサポーターの観察によれば、以前は食料を探しに行くために乳児をまだ5歳にも満たない兄弟にあずけ、事故が起こるケースがしばしばあったが、最近では乳児を大人にあずけるのが徹底されるようになり事故の件数も少なくなった。また、集落巡回を徹底することにより患者を早期発見することにつながっている。結果的には、今期中に(2009年4月~2010年3月)事業地域5集落でなくなった乳幼児は4名のみであり、このペースが続けば乳幼児死亡率のドラスティックな改善が期待される。

今年度の大きな成果としては、乳幼児全員を記録にして把握できるようになったことである。この乳児の記録表は、0歳児から5歳児までを対象とし、一人ず



つ写真、名前・住所等の個人情報、身体測定結果、予防接種歴、主な病歴を一枚のシートに記入するようになっている。これ、一目で乳幼児一人の情報全体を把握することができるようになった。

このほかにも親同士交流の場をもち、互いに子育てについて相談し、助けあえる関係づくりに取り組んでいる。一つ目には、識字ステーションにて行ってきた給食支援をこれまでの生徒に加えて栄養失調である幼児にも提供、さらに幼児の母親に対しては栄養・料理の仕方の勉強もかねて調理実習を行っている。栄養を改善するとともに、調理実習を通して、母親同士が交流することにより、母親のネットワークを広がっている。



### 3-3 ヘルスサポーターの成長

スタッフの能力を単年度で評価することは非常にむづかしいが、毎日、毎週の作業をルーチン化し、それをモニタリングすることで、ゆっくりではあるが確実な成果を得ている。特にアムナイ川流域ではほぼ毎日各世帯を訪問することを徹底することによって、患者

や住民の健康管理をかなり徹底できるようになった。そのことは各保健ステーション(センター)の利用率が上がり、町に降りる患者数が減少し、また乳幼児の死亡件数が少なかったことにも伺える。

ヘルスサポーターの全体評価（日本人保健衛生指導員による）

状況	内容	2008年	2009年
事務所で	事前問診ができる	○	○
	地元の医療機関へ付き添える	○	○
	患者記録台帳へ記入できる	△	△
	患者の引き継ぎができる	△	△
	処方箋を理解し患者に説明できる	△	△
	州立病院へ付き添える	○	○
	入院手続きができる	○	○
	患者記録台帳をPCに入力できる	△	○
	モニタリング等のスケジュール管理ができる	△	△
	全体を統括し指示できる	×	△
ヘルスケアセンター (ステーション)で	住民の健康状態を把握している	△	△
	患者に適切な指導ができる	△	△
	結核の治療薬(皮下注射)がうてる	○	○
	病院と連携して薬を提供できる	×	△
	予防接種ができる	×	×
	症状から何の病気か見当をつけることができる	×	×
結核	結核治療のプロセスを理解している	×	△
	患者のモニタリングができる	△	△
	RHU(保健所)との円滑なコミュニケーションがとれる	△	△
	RHU(保健所)と協力して患者にあった治療スケジュールを立てることができる	△	△
	結核患者全体の治療スケジュールを把握している	×	△
	患者の様子から投薬期間中の生活指導ができる	×	×
マラリア	マラリア治療のプロセスを理解している	△	○
	マラリアの予防指導ができる	△	△
ファーストエイド	傷口の消毒ができる	○	○
	体温を測定できる	○	○
	やけど・骨折時の対応ができる	×	×
	血圧を測定できる	○	○
医療の基礎知識	妊娠・出産のメカニズムを理解している	×	△
	薬の基礎知識がある	×	△
	結核・マラリアの知識がある	×	△
	地域に蔓延する病気についての基礎知識がある	×	×

## 4 マンニャン人間開発センター

### 4-1 各種職業訓練

#### 製菓指導

受講者の半数以上が初心者だったが、昨年の受講者の能力に引き上げられるようにして、全体的に大きく技術が向上した。昨年の、技術を洗練させる必要があるという反省の下、ひとつの型を徹底的に反復練習させることにより店頭に並べても問題ない程度のもの

を製菓できるまでになった。

特に、スポンジケーキ、シュークリームについては指導者が不在でも問題なく作ることができる。今後は基本的な技術を活かし、他のレシピにも対応できるよう応用力を養っていきたい。

#### 活動の記録（一部）

日付	内容	写真
2009/7/4	デコレーション練習③ アイシングでバラの制作	 
2009/7/11	デコレーション練習④ ピーナッツマジパンでバラの制作	 
2009/8/22	シュークリーム②	 
2009/9/12	クロカンブッシュ (シュークリームツリー)	 

2009/10/3	クッキー		
2009/10/24	シュークリーム⑥		
2009/11/14	スポンジケーキ①		
2009/11/21	スポンジケーキ②		
2009/12/12	デコレーションケーキ②		
2010/1/23	デコレーションケーキ⑤		

2010/2/6,7	デコレーションケーキ⑦	
------------	-------------	--

### 洋裁指導

洋裁訓練においても半数以上が初心者であったが、丁寧な個別指導により全員が簡単な服を製作できるまでになった。昨年からの受講者は洋裁だけでなく編物にも取り組み始めており、技術に広がりがある。

また、洋裁訓練の最大の効果は技術を日常で活かせるようになったことである。奨学生の服を直したり、雑巾やカーテンなど必要に応じて作成したりするなどできるようになった。

### 活動の記録（一部）

日付	内容	写真	
2009/6/20	ブックカバー作り ／ シャツの作り方の 学習		
2009/7/18	ブックカバー作り ／ 雑巾作り		
2009/8/1	ブックカバー作り ／ シャツの作り方テ スト		

日付	内容	写真	
2009/8/8	ブックカバー作り ／ 寸法取り		
2009/12/19	ニット帽子作り/ 縫製／シャツの作 り方の学習		
2010/1/16	ニット帽子作り/ 縫製／ブックカバ ー作り		

### 合鴨農法及びパーマカルチャー事業

パーマカルチャー農場の経営は、昨年度まで利用していた農場を手放し、新たに入手した土地に移動したこと、鼠害やエルニーニョによる干ばつが続いたことなどが原因で収益は大きく下がった。ただ、合鴨農場の

ほうは、コスト管理と着実な収量の増加により利益が大幅に増え、事業全体としては昨年度なみの結果となった。

年度	パーマカルチャー農場			合鴨農場			合計利益
	支出	収入	利益	支出	収入	利益	
2005	34,000.00	12,000.00	-22,000.00	60,000.00	40,000.00	-20,000.00	-42,000.00
2006	13,028.00	24,582.00	11,554.00	54,507.00	49,350.00	-5,157.00	6,397.00
2007	7,915.00	45,713.00	37,798.00	37,704.00	38,310.00	606.00	38,404.00
2008	8,918.00	26,448.90	17,530.90	20,328.50	46,200.00	25,871.50	43,402.40
<b>2009</b>	<b>2,575.00</b>	<b>7,650.00</b>	<b>5,075.00</b>	<b>25,881.00</b>	<b>64,000.00</b>	<b>38,119.00</b>	<b>43,194.00</b>

## 現地スタッフの評価

下図はスタッフの能力を昨年度と比較したものである。保健事業におけるサポーターの評価と同じく単年度での成果を計ることはむづかしいが、シニアスタッフ（大卒以上もしくは5年以上在籍）の住民に対する

指導力はかなり向上している。来期の目標でもあるが、スタッフの間で一種の管理組合を組織し、お互いがより緊密に協力、評価しあえる環境を整備することで仕事への意欲や責任感を育てていきたい。

## 現地スタッフの評価（日本人スタッフによる）

	内容	2008年	2009年
就学促進事業	子どもの生活指導ができる	△	△
	公文ワークシートの採点ができる	○	○
	文房具・日用品など生活に必要なものを滞りなく調達することができる	△	○
	入学にかかわる各種手続きができる	△	○
	学校側と円滑にコミュニケーションが取れる	△	○
	子どもの性格や資質など特性を把握している	△	△
	宿題など学習のアドバイスができる	△	△
	子どもの相談にのることができる	△	△
	子どもの学習レベルを把握している	×	×
	学習状況に応じて指導することができる	×	×
	子どもの様子に目を配りながら指導することができる	×	×
調理	5種類以上の料理を作ることができる	○	○
	栄養バランスを考慮して調理できる	×	△
	予算を考慮して食材を調達することができる	△	△
	人数と量を考慮して調理することができる	△	△
	10種類以上の料理を作ることができる	△	○
	子どもに調理指導ができる	△	△
識字教室	年齢や学力に応じた指導ができる	△	△
	適切な教材を選択し提供できる	△	△
	子どもたちに指示が通る	○	○
	大きな声で授業を進めることができる	○	○
	子どもの生活指導ができる	△	△
	子どもたちとの信頼関係がある	○	○
	子どもの出席数を把握し記録できる	○	○
	保護者とコミュニケーションをとることができる	△	○
	出席者数を確保できる	×	△
村落開発	住民とコミュニケーションをとることができる	○	○



	内容	2008年	2009年
	住民の協力を得ることができる	△	△
	ミーティングを開いて住民に指導することができる	○	○
	住民と信頼関係がある	△	○
	植樹の世話、管理ができる	×	△
	学校菜園がある	×	△
	住民の親族構成を把握している	○	○
	周辺集落までの土地勘がある	○	○
	住民に農業指導ができる	×	△
	スタッフの食事をまかなうだけの収穫量がある	×	×



- できている
- △ 努力が必要
- × できていない

#### 4-2 施設の拡張/充実

2005年にマンニャン人間開発センターが完成以来すでに5年、すでに当初ゆとりがあった各施設はパンク状態になっている。この間事業地数は倍となり、スタッフ数寮生共に倍となった。また、新規事業であるパーマカルチャー事業では日本から専門家を招聘す

る予定であり今後ますます外部との交流が活発することが望まれるがそのためには最低限の施設の整備が不可欠である。こうした新たなニーズに対応できるよう今期は施設の大幅なりノベーションを行った。

	施設	キャパ	写真
マンニャン人間開発センター	スタッフハウス	二階増築、前の3室から6室に	
	学習室/食堂	約50名収容	
	寮	5室から7室に増築	

	施設	キャパ	写真
アムナイ川事業地	モデルトイレ	アムナイ川事業地 5 村すべて	
	水道施設	アムナイ川事業地 3 村	

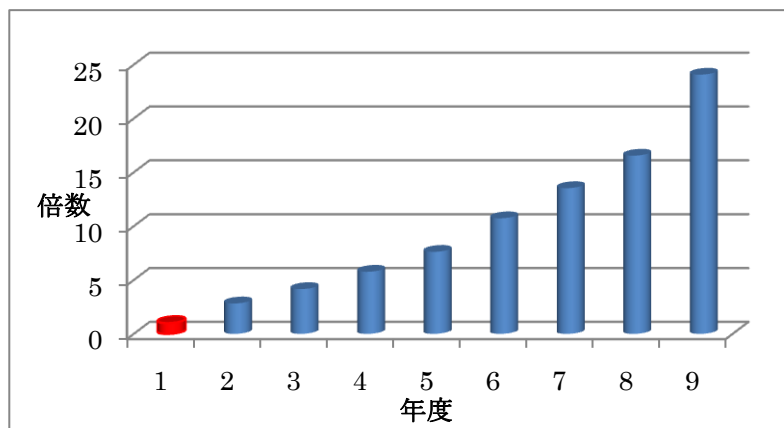
## 5 不要品セールス

今期 2 月をもって事業を終了することになった不要品セールスであるが、皮肉なことに今期は売り上げが昨年度比でも約 40%増の収益、過去最高を記録した。古着などの途上国への援助は地場産業の芽を摘み、政治家に悪用されるなど非難の声もあるが、本事業に限って言えば“送り手”と“受け手”の間は相思相愛、またその収益が地元的最貧困層であるマンニャン族の教育費、医療費を稼ぎ出してきたわけであり完全なウィンウィンゲームであった。

ただあまりに大きな成功が一部の役人の不正行為を誘発することになり、結果として事業を終了せざることになったことは無念である。

今後現地運営費の大きな財源となってきた代替事業を発掘し、育てていくことは並大抵のことではないが、本事業を通して培われた現地のスキル、“支援者へのレスポンス”（感謝状作成、問い合わせへの対応など）をうまく活かした新事業を開発していきたい。

不要品セールスの伸び率（2001 年度を 1 とする）



## 1. 日本国内の活動

現地報告に続いて、日本国内での活動を報告する。国内ではボランティアが中心となって展示会や報告会を企画した。

### グローバルフェスタ (2009年10月3日/4日)



昨年に引き続き、国内最大の国際協カイベントのグローバルフェスタに出展した。今年は例年の活動紹介の展示や21世紀協会恒例のワークショップ「クイズ・カルチャーショック!!」に加え、現地で実施中の「ベビーウォッチ」がチャリティーランの支援先として選定され、チャリティーランのブースにてベビーウォッチのプロジェクト内容を紹介する展示も行いました。チャリティーラン参加者からは、こういう事業に使われるなら走って良かった、というお言葉を頂いた。

### 川島寛之帰国報告会 (2009年11月7日)

JICA 地球ひろばと共催で、「どこから手をつけたらいいのだろう?—乳幼児死亡率が6割を超える少数民族—」というテーマのもと、現地で実施中の保健衛生事業を中心に活動報告を実施した。

参加者にとっては、高い乳幼児死亡率の背景にあるマンニャン族特有の医療活動のボトルネック(タガログ

人からの差別や偏見・字の読み書きが出来ないことが一因で適切な医療が受けられないこと・移動を繰り返すために治療活動のモニタリングが出来ないこと等)などの具体例に基づいた報告に、まさに「どこから手をつけたらいいのだろう?」という現地の実情に触れることができた機会だった。

### 『世界銀行情報センター・パネル展示&コーヒーアワー連続講演会』 (2010年1月5日~15日)

農業・農村開発 NGO 協議会 (JANARD) と世界銀行情報センター (PIC 東京) 共催で「有機農業は貧困を救う」をテーマにパネル展示、連続講演、パネル討論会を実施した。21世紀協会は、JANARD の会員団体として、1月13日に「パーマカルチャーによる

農村開発」と題した講演会、15日には池田理事長がパネリストとして21世紀協会の有機農業への取り組みとして、パーマカルチャーを導入するに至った経緯や現状を説明した。

### 田畑智美帰国報告会 (2010年3月6日)

2年間のインターン生活を終えて、現在は現地職員となった田畑智美がミンドロ事務所の奨学生の日常から、現在 JICA の草の根技術協力事業として実施中の「アムナイ川流域少数民族保健支援システムの構築」の一貫として田畑が従事する保健事業や現地スタッフを対象とした職業訓練事業について報告した。マンニャン族への保健衛生の指導・モニタリングの実施や

裁縫・お菓子作りの技術など目に見える奨学生出身のボランティアスタッフの人材育成が進んでいることもある一方で、自分で考えてイニシアティブを取って行動できるまでには至らないという課題も見受けられるとのこと。奨学生やボランティアスタッフの成長を感じたのと同時に、田畑自身の現地スタッフとしての成長を見て取れる報告会だった。